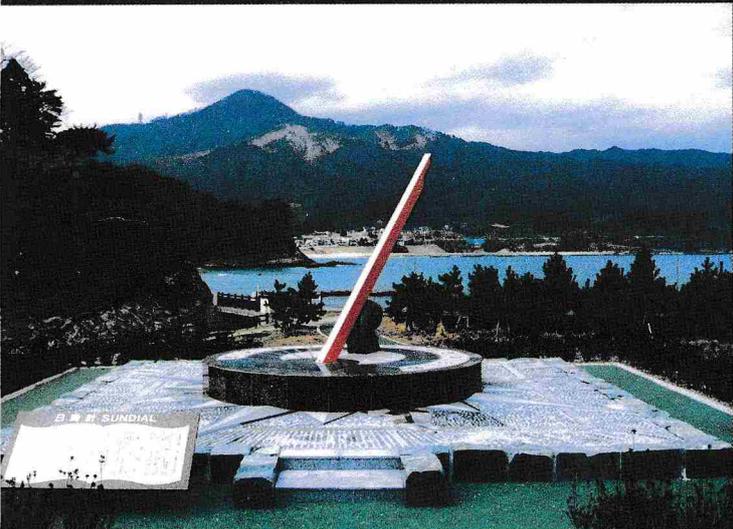




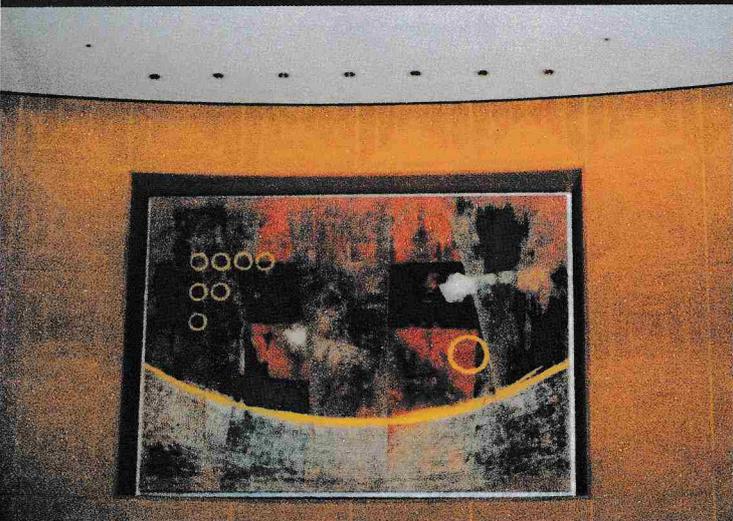
作品 (1998年)



彩筆



吉里吉里時間を刻む日時計



NO.29 1999.8

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会



aaca会員
彫刻家
HITOSHI KITAMURA
北村 壘
神奈川県川崎市多摩区喜仙谷2-25-3
TEL 044-944-0724

【作品(1999年)】
設置場所：
1400mmH×7400mmW×7500mmD

抽象的な形体を作るために私は私自身の変換のシステムを用いている。
又、色彩は12箇の色相を4オクターヴの明度段階に展開して用いている。
現代という都市文明に挑戦したい。



aaca会員
染色造形家
KENICHI SUGANO
菅野 健一
神奈川県横浜市神奈川区白幡上野21-17

【彩華】
設置場所：ギャラリーみその
1920mmH×3900mmW×25mmD

宇宙のエネルギーの偏在を自然の形象や人工的形体を通して見つめ、その空間の中で心が何の束縛も受けずに自由気儘に遊べる状況をオプティカルに表現しました。



aaca会員
サンダイアリスト(日時計作家)
TERUKO OHARA
小原 輝子
神奈川県相模原市上鶴間5-6-5-107
TEL 042-744-4499

【吉里吉里時間を刻む日時計】
設置場所：東経141°56'49" 北緯39°22'23"
(岩手県吉里吉里海岸公園)
7000mmH×8000mmW×8000mmD

地元関係者の希望に応じて、海をシンボルにした立体彫刻等の形と素材を決め、正しい吉里吉里時間のための計算と製作を施し、陸中の美しい景色に恵まれた公園で、町の方々の自慢の記念碑として毎日「時」を告げています。



aaca会員
壁画家
MARIKO HAYASHI
林 まりこ
千葉県市川市大和田4-16-13
TEL 047-377-3031

【オリエントの息吹】
設置場所：ホテルオオクラ福岡
2400mmH×3400mmW

東洋を設計コンセプトとしたホテルのロビーラウンジ、オリエンタルな宗教上の神秘と自然への崇敬を、日ざしや波によって、又丈明の息吹を朱の色によって表現しました。この空間に浮遊するエネルギーを感じてください。

CONTENTS

「文化・芸術と都市空間」	1
時代の華一輪	4
aaca特別トーク	6
aacaトーク	8

■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合わせ下さい。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行いますのでご了承下さい。

発行：財団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員長 玉見 満

副委員長 高部多恵子

富田俊男、北村孝昭、石田真人

渡部毅志、高塚信吾、山崎輝子

制作協力：(株)SP建材エージェンシー

風土と都市空間

私たちが風土という言葉が聞かなくなっただけから久しい。都会に生活していて、たまに風土という言葉が聞くと懐かしさと同時に何か後ろめたい気持ちにさせられる。それは風土という懐かしきも大切なものを忘れ、裏切ってきた自分に恥じる気持ちがあるからであろう。

風土とは「その土地の気候、気象、地質、地形、景観などの総称である。」「歴史を離れた風土もなければ、風土を離れた歴史もない。」「家屋の様式は、風土とのかかわりなしに成立しない。」「住民の慣習や文化に影響を及ぼすその土地の気候、地形、地質など。」と言われている。

言葉を変えると「風土はそこに住む私たちの家屋の様式、慣習、生活、文化を規定する条件でありその結果である。」と言ってもいいであろう。

私たちを取り巻く今の社会はことごとく風土に背を向けてきた。いや、それ以上に風土の束縛から逃れ、解放されることを望み実現化してきた。都市の歴史はそれである。過剰なまでの人間の欲望の肥大化。快適性、スピード、大量生産・大量消費、情報化、経済至上主義（マネーゲーム）、そしてグローバルスタンダード。まさに、グローバルスタンダードこそ風土の対極にあるものである。全ての経済的垣根を取り払うことだから、ますます金に支配されるということだろう。

マネーゲーム（投資）は既に一般化しつつあるから、突然垣根を越えてなだれ込んでくる。経済のパワーは地域性など

顧慮しない。情報とタイミングが金を生むのでスピードがものをいう。大多数の人間が住む都市環境はこの様な状況の中に晒されている。有り余る情報と速すぎる変化に風土として熟成し定着する時間（歴史）が無さすぎる。

私たちは風土という言葉に懐かしさとともにむなしさを感じるのだが、それは既に後戻りできそうもないことを知っているからであろう。

便利さや快適さ、物質的豊かさ、有り余る情報が私たちを幸せにしたのだろうか。それどころかもはや人類滅亡までも視野に入れざるを得ない状況になってきたことを誰もが実感しだしたということではないだろうか。

「風土」というと「身土不二」という言葉を考えてしまう。これは読んで字のごとく、肉体は土だということで、人間は土から出来た作物で生かされ死んでまた土に返ってゆくということだ。「十里四方のもの、即ち歩いて手に入れられる範囲のものを食べていけば健康になれる。」と先人は教えている。

私の尊敬する百姓、赤峰勝人さんは雑草を神草さん、虫を神虫さんと呼び「宇宙に存在する全てものは循環している。今の地球でいちばん壊れているもの、いちばん修復しなければならぬもの、それは循環です。この宇宙に存在する全てものは様々に支え合い、お互いを生かし合っています。水も空気も光も土も鳥も虫も、そして人間も、地球もです。何が欠けてもいけません。何が秀でてもいけません。宇宙には全てのもものが同じ重

さで必要なのです。宇宙の全てのもものを一つにつなぐものが循環の環です。私はそれを土まみれのニンジンから教えてもらいました。」と述べている。

都市空間を考える上でもこの循環の環を考えざるを得ない状況に来てしまったようだ。

この様なことを考えながら、東京の街の変化を長い間見続けている建築家の伊郷さんと南千住から汐入、そして向島へと一日歩き廻った。

汐入は再開発による風土の落日を見るようだった。新しい高層マンションを前に、ほとんど住人の居なくなった路地や空き地に春の草花が萌えさかっている。まもなく再開発の都営マンションに住むという年配の男性は、地べたから離れること、大切に育てた植木を残していくことに戸惑いを隠せないようだった。そして、娘は世円谷に住むという。

長い歴史と土地に根ざした生活が、あっという間に更地になり、すでに隣にはケヤキ通りという名のどこでも見られるような立派な街区が出現している。この住人でもない私だが、この地で生きてきた人たちの思いとその意味に想いを巡らせ、言い知れぬ寂しさを感じ、そして、堤防上につくられたいくつもの青いホームレスの住まいと萌えさかる草花が束の間のむなし抵抗のように私には思えた。

山本 誠
環境・造形デザイナー



空地に草が萌え、ホームレスの住まいが並び、消えようとしている汐入のまち。(平成11年4月撮影)

都市の中の風土

仕事が忙しく机の前に拘束される日々が続くと、無性に町へ出たくなる。病的とも思われる徘徊の癖はなかなか治らない。

決められた散歩コースを歩くのもいいのだが、目的もなく臭覚にまかせ歩くのも楽しい。ごく普通の風景の中に楽しみがある。散歩の達人は多くいるが、永井荷風はその最たるものと誰もが認める所だ。「断腸亭日乗」を読むと、彼が毎日の散歩からいかに多くのメッセージを受け取っているかが分る。「断腸亭日乗」は1917年（大正6）から彼の死の前日1959年（昭和34）に至る42年間の日記であり、町や風俗の推移が克明に記されている。偏奇とも言える強い個性の持ち主で、鋭い観察眼で改めて読むと我々に警鐘を鳴らしているようにも受け止められる。

町歩きの実感、発見の喜びといえる。生活感あふれる裏路地。誇らしげに建っている洋館。また、石垣、門塀、橋巡り、坂巡りなど定点をもって町を歩くのも面白い。

それから、圧倒的な自然や歴史に触れたとき、古人の空間認識を探ることが出来る。現在、都会人は中高層の建物に覆

われ、自然環境や地形を体感することはほとんどできない。しかし、そこにあった建物が消え、その地形を目の前にしたとき、皮肉なことにはじめて風土という言葉に向き合うことになる。再開発の現場で、更地になった町を歩いたとき、よくそのことが分るだろう。

今では、町の姿を消しつつある汐入の町（荒川区南千住8丁目）を訪れたときもそうであった。この町をはじめて訪れたとき、あろうはずもない海辺の町を連想させられた。それは汐入の町が隅田川の大きく蛇行する半月状の土地にあり、大きな空が視界に入ったせいだろう。上杉謙信の家臣4名が落ちのびてきて、この地に辿り着き農業を始めたと伝承されている。この町をはじめてつくった人たちは、川が運んだ土砂が堆積した自然堤の上に家を建てた。今でこそ背の高い防波堤に囲まれているが、川は幾度となく氾濫し、開拓に際しては苦難の連続であった。副業として胡粉の製造を行っていたが、ここで産する胡粉は能面や人形に使用する良質のもので、幕末から明治初期には生産量も多かったという。町中に今も見られる石臼は蛎殻を挽き、胡粉を製造していた名残である。

この地は、隅田川に北と東を囲まれ、

一種の袋小路を形成していた。橋は無く、明治時代になりはじめて渡船場が許可された。そのため汐入はどの時代にも外の町とはある意味において隔離された閉鎖的な構造を持っていた。

ここに建つ旧家の建築の特徴は、川の氾濫時の備えがあり、盛土をして道路より高く屋敷地を構えていることである。また、非常時に家財道具を上げるため屋根裏部屋を付けていた。屋根裏部屋は土間よりはしごで上がるようになっていた。また、昭和63年の民族調査報告書によると軒に田船を吊るし水害に備えていたという。川との生活は切っても切りはなせなかった。ネバツチと呼ばれる土手の枯土は左官材料として売りに出していた。

蜆や川魚が生活の支えであった。創設100年にもなろうとする造船所もある。全てを飲み込んでしまう氾濫した川の恐ろしさは想像を絶するが、川は生活の場であると同時に心のよりどころであった。

汐入に限った話ではなく年配の方々の話を伺っていると、東京のどこでも川辺で遊んだ話がよくでる。いかに私たちの生活と水面が遠くなったかが分る。

東京の町は台地と低地によって構成されている。江戸城に近い台地の上は、武家地となり、また、台地と台地の間に刻



隅田川と迷路のような路地の中に、江戸時代から住みついた旧家が点在している8年前の汐入。（平成3年4月撮影）

まれた低地は町人地として発達した。港区の高輪、白金台、文京区の本郷、西片等には、明治以降武家地を受けた実業家などの邸宅が多く残る。低地には町人地が発達し、それを引き継ぎ商業が発達している。それぞれの町は、風土の中で長い時間をかけ個性をつくってきた。台地の山手と低地の下町とではおのずと意識が異なり、その異なった意識をつなぐのが坂である。低地へと水が集まり川となり谷を走る。したがって谷におりる坂は、川に出会い橋を渡る。山手と下町を川は分断し、坂と橋は両者をつなぐ。しかし、今では多くの中小の河川は暗渠となり、東京の都市の性格は大きく変わってきた。

文京区本郷を例に考察する。本郷は関東大震災、戦災を免れた地域であり、歴史的建物が多く残る地域でもある。本郷三丁目交差点に今も続く老舗かねやすは、「本郷もかねやすまでは江戸の内」と呼ばれたように、ここを限りに郊外の閑静な土地が続いていた。武蔵野台地の東の端にあたり、江戸切絵図によると加賀金沢藩・前田家の上屋敷や高崎藩・松平右京亮の中屋敷などの広大な大名屋敷が見られる。前田家の上屋敷は明治になり文部省が買い上げ東京大学となり、本郷の町

を学生の町として特徴づけてきた。台地上には他にも中小の武家屋敷が広がっている。これらの土地は明治以降、役人、学者、実業家などの手に渡り、大邸宅が並ぶお屋敷町となった。現在では邸宅も少なくなり、中高層のマンションが建ち並んでいる。司馬遼太郎は「本郷界限(街道をゆく)」のなかでこの土地が近代化を急ぐ日本が欧米文明を一手に受け入れ、地方へ分ける役割を担っていたとする。

本郷台地の中央の尾根道(現在の本郷通り)は、かつての中山道・日光街道で周辺は町屋であった。ここは今も商業地として栄えている。本郷は、坂の町としても名が知られているが、その中でも菊坂は本郷の坂の代表とされる。坂を下ったところにある伊勢屋は、貧しかった樋口一葉が通った質店として有名である。近くに樋口一葉の旧居跡があるが、その路地は往時を偲ばせてくれる。この周辺の路地には長屋や間口の狭い住宅が密集しており、下町気質が強く残っている。

先に述べたように、東京の構造を一言で言えば台地(山手)に対する低地(下町)であり、ここにもその一端を見ることが出来る。

風土という言葉が、自然環境、歴史的環境といった言葉と意を異にするのは、それが経験に係わる系を持つからであろう。長い営みのなかで繰り返される生活は、ゆるやかに変化していく。人から人へ身をとおして受け渡し、記憶をつなげる。その作業が、風土を生み出すといつてよい。今日的な技術体系のなかでは、引き継ぐといった言葉は希薄である。

汐入の町では生産と消費の形がよく見えた。それは経験を次に渡すのに十分な、ゆるやかな時間が流れていたせいであろう。汐入のまちが消えてゆくのは、時間の流れに追いつかなくなったとも思える。本郷の町はその顔をなくし、均質な空間に変わろうとしてゆく。

風土とは、そこに暮らす人々の歴史そのものであり、自然環境と歴史環境、文化、人、出来事など、空間の総体として考えることが出来る。均質化した都市ほどつまらないものはない。次世代に豊かな環境を引き継ぐために、私たちの周りの環境を見直す必要がある。あなたの家の廻りを散歩して大切な何かが見つかったなら、そのひとつひとつがこれからの町づくりに役立つに違いない。

建築家
伊郷吉信



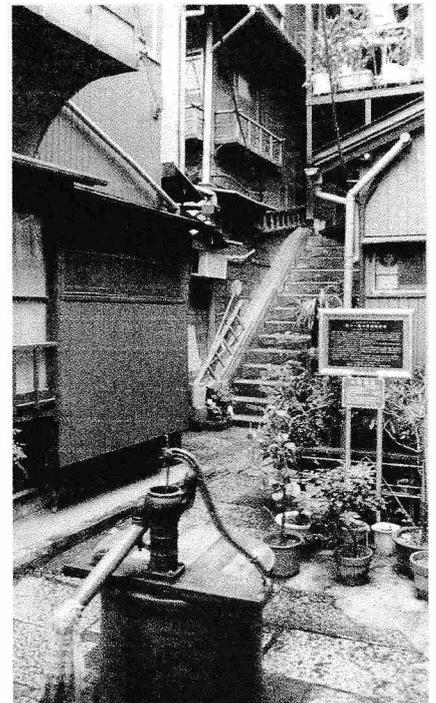
主が去り、植木が茂る庭に、胡粉を挽いた白が残されていた。(平成11年4月撮影)



汐入の旧家。川が氾濫したとき荷物を上げる屋根裏部屋があり、軒には田船が吊されていた。(平成3年撮影)



新しい街けやき通り、歴史の記憶も生活の匂いもまるで無い。(平成11年4月撮影)



樋口一葉が生活していた文京区菊坂付近の路地。井戸は現在も使用されている。(平成8年撮影)

時代の華一輪



aaca会員
日本画家
TAIJI HAMADA
濱田 台兒
東京都杉並区成田西2-3-12
TEL.03-3311-7281

夏の花

花は牡丹である。中国では昔から花王と称した、そして富貴艸とも云った。

吾々日本画家は、富貴花としてその美を競ってきた。牡丹の色は、赤・白・墨絵のような黒紫も魅力的である、然し何といっても代表は、薄桃色であろう、牡丹の美の特長に大きな花卉の薄さであろうか、幽玄であろう。

牡丹については、私の郷里の近い所に大根島という牡丹の島があった。

梅原龍三郎先生、橋本明治先生等々の先達もこの牡丹を愛して描いた。

今春、松江日展が開かれ私も関係が有るので、久しぶりに大根島に車でいった。(以前は、舟で行くしかなかった。)その島の変わり方は驚きとともに悲しんだ、交通が便利になって昔の感じはなくなった。ここは、神の国で、神の作った風景を人間の手でこわしてしまった。時代と云うことであろうか。

牡丹が終れば、菖蒲の花の鮮やかな色彩が目に入る。葉が日本刀のように切れ

味がいい。

以前、ローマに行ったときと思うが日本館と云うのがあって、前田青邨先生の大作、菖蒲が飾ってあった、豪快無類の名品で、群青の色が美しく特別の印象的で今も思い出される。異郷にあって少しも異和感もなく誠に立派に感ぜられた。

純日本画は、国際的の場にも素晴らしいものと思われた。

さて、これから桔梗も咲き露草・朝顔等々咲き乱れ、やがて萩の花が美しく優しく風に揺れ始めれば秋が来るのである。



富貴花 第33回日春展(1998)



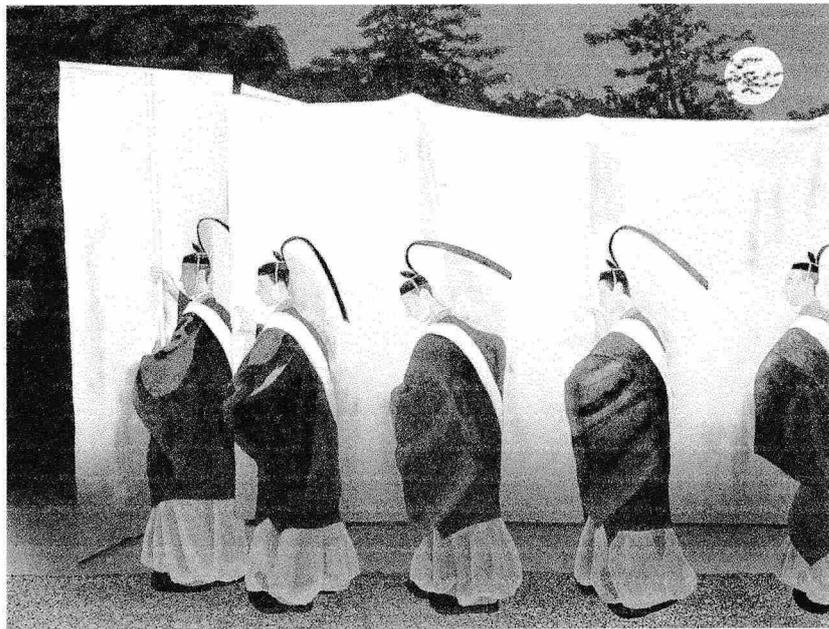
舞楽 納曾利(龍) 第29回日展(1997)



清秋 第23回日展(1991)



富貴花 第7回「現美展」



絹垣渡御(伊勢神宮遷宮) 第25回日展(1933)



aaca会員
彫刻家
KYUBEY KIYOMIZU
清水 九兵衛
京都市東山区五条橋東6-569
TEL.075-561-1959

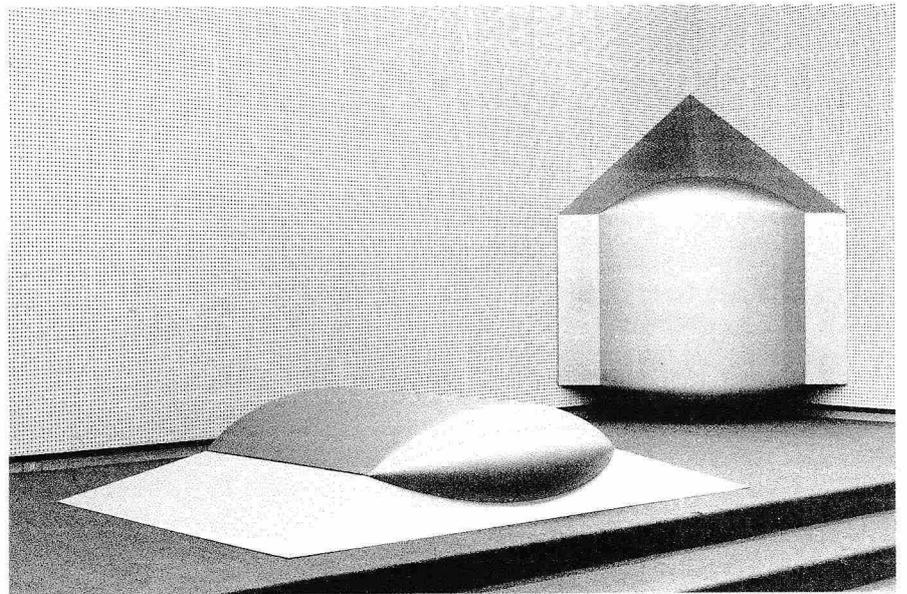
建築と彫刻の狭間で

私が建築を学び始めたのはまさに大戦勃発寸前といった時代でした。したがって海外の建築事情は当時の同盟国だったドイツ、イタリアのわずかな姿を垣間みる程度にすぎませんでした。それにしても、イタリアの建築には殆ど彫刻が付随していましたが、それが彫刻への視点の移行に連なっていると言っていいでしょう。ですが、それを行動に移すことなどは戦争を楽監視した夢の夢だったのです。兵役中は生還出来たことさえ不思議な程で、奇しくも生き残りはしたものの頭の時計が動き始めるのには相当に時間がかかりました。それだけに、これからを余生と思えば、戦前の夢を夢のままに終わらせたくないという気持ちが先行して、総てを振り切って東京芸大を目指したのです。建築への関心からも環境の中での実材造形にひたすらひかれていた時代でした。所が、思いがけない縁で陶器の世界に身を置いてしまいましたが、その後抽象彫刻に転じ、ようやく初志でもあった野外や建築に連携した作品を主流にすることができました。札幌から福岡にわたって多くの作品を作らせて頂き、それぞれに思い出がありますが、とりわけ心に残っているのは、大きさもさることながら、やはり、三井海上火災本社ビルの

作品だったと思っています。制作課程でこれほど協力して頂いたのは当時としては全く珍しいという気がしてなりません。最近ではずいぶん建築現場の理解も得られるようになりましたが、建築内での仕事を始めました頃は鋳り職人と同一視され、みじめな思いをしたのも度々でした。最初に取り組みました或るスポーツセンター内の壁面の仕事を思い出します。私一人では到底出来る仕事ではなく、鑄造会社の人たちの協力で何とか完成させま

したが、夜間より仕事をさせてもらえず時には嫌がらせもあってずいぶん苦しみました。これも今では思い出の一つと言っていいのかもしれませんが。

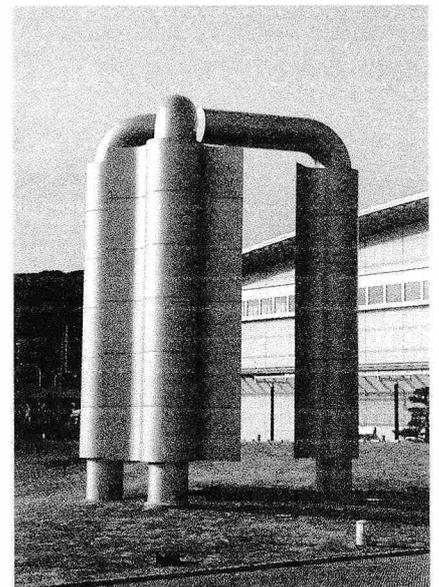
所で、このような建築を対照にした意識が作品の上にはっきりと出るようになったのは南画廊で発表しました(AFFINITYの継続)からでしょうか。これが屋外にも進出する切っ掛けになっていると思っています。



アフィニティの継続 (現在 彫刻の森美術館)



「朱亀」三井海上火災本社



「語り合い」島根県立美術館



aaca会員
ステンレスアトリエ 空
NAOYA SAKAGAMI
坂上 直哉
東京都調布市西つつじヶ丘2-18-8
SATAビル301
TEL.03-3308-8418

氏はPAの役割を次のようにとらえられていました。pre-historic(有史以前)、アーティストはコミュニティにとって大切な人であり、アートはコミュニティのvoice(声)だった。しかし、今ではアートの世界とsociety(社会)は離れてしまっている。PAはそれを修正するためにある。PAが地域社会にとって有用な構成要素となり得るシステムとPhilosophy(哲学)の構築をアドミニストレーターとして模索してきた。

アラン氏がこのゆよな考えに至った背景には、米国のPAの状況変化があったようです。

- 1960年代は裕福なコレクターが作品をパブリックスペースに寄贈した。
- 1970年代は作品が設置される場所について考え始めた。
- 1980年代はコミュニティが大切だと気づき、作品について皆と考えようとし始めた。
- 1990年代にはプロセスを大切にしようという動きが出てきた。
- 1992年からは皆の税金を使うアートの意味を考えるようになってきた。(philosophy)

年代によってPAの目標も変化してきたと思われるが、配付された資料には1988年に定められた「メトロアートの諸目標」が3項目あげられていました。

- 1) その土地固有、又は現地コミュニティを反映したランドマークを創造する。
- 2) アートワークは少なくとも25年間は持続するものでなければならない。
- 3) アートワークは芸術・文化の破壊行為に抵抗しうるようなものであり……

この変化の早い時代、PAがコミュニティのマインドに深く根ざさなくてはならないという明瞭な哲学を持った目標と理解しました。

5月28日、コトブキDIセンターにて、ロスアンゼルス交通局で長年アート・アドミニストレーター(企画・管理・運営)として活躍されているアラン中川氏を招き、現在アメリカで実践されているパブリックアート(PA)に対する新たな試みについて講演していただきました。氏のスタンスを一度伺っただけで講演内容を報告するのは、はなはだ心もとなく正確性に欠けているとは思いますが、PAをテーマに活動をしている調査研究委員会風にまとめてみました。

スライドで紹介された1990年代のロスの事例の内、私が感銘を受けた2例をあげてみます。

1. ロスのスラム街では、外壁や橋などの公共物に所狭しと落書きがあった。ここはメキシコやプエルトリコからの移民が多数を占め、麻薬、暴動など問題の多い地域だった。市とコミュニティとの話し合いから、この場に最も相応しいPAは、地域のメンタリティを最も深く理解している落書きだと考え、落書きアーティスト(?)に改めて市がお金を払い壁画として落書きを依頼した。
2. ロスのダウンタウンの一地域に大きな石のごろごろころがっている空き地がありホームレスの住み家となっていた。一人のホームレスが、図書館の本で見た日本庭園に感動し、知識を深め、彼なりの石庭を作った。それは地域住民はもとより遠来の客を呼ぶほどの出来栄えとなったので、市はその空き地を購入し公園とした。

最初からPAを固定観念でとらえていたら視界に入っただけでなかったような事例でした。コミュニティと行政が自由な発想で話し合えるシステムと、それを支えるソフトという網の目があったからこそ実現したのでしょう。

後日、氏が関与されたメトロPA(Blue, Green, Red, の各Line)のホームページにアクセスしてみたところ、想像以上に数多くのPAが設置されていました。個々のPAとコミュニティ、サイトとの関係、アーティストの考え方が詳細に書かれ、作品の成り立ちについての情報を誰でもが入手可能なシステムになっており、その数とともに情報の濃密さに驚かされました。ロスのPAはポストモダン的な雰囲気をもっているようですが、ポストモダンの本質的な意味である

「場所の非特定性」、そして「深く遊びに属する」という性格とは極めて遠い位置にあり、「土着的」で、「キマジメ」な印象を受けました。

ロス市に於ける約20年に渡るコミュニティに対するPAの様々な試みに深い尊敬の念を持ちます。しかし、場所性やコミュニティの背景についての知識はインターネット上だけなので明言は出来ませんが、そこから創造されたPAには共感できませんでした。講演でスライドを見た調査委員の山本氏からも同様の指摘がありました。アラン氏のPAを創出する手法は、ソフトとハードのキャッチボールから夫々のボーダーを超えて作品を生み出すものと理解しています。ソフトの背景に各地固有の多大な文化的要素がふくまれ、そこから文化の共有性を見だし、アーティストと共に地域社会に有用性、豊かさを創出する「感性共感技術」です。そのソフトによりハードを支持形成する「循環式感性共感技術」と言えそうです。この点がグローバル化の時代にはとても大切なことに思えます。そのプロセスとソフトについて共感しつつも、そこから生まれたPAに共感が持てない——。異なる国のコミュニティに属する私が共感できないのは、氏の手掛けられたPAが深く地域に根ざしつつある証拠だと言えます。この事象に今後のPAの本質があります。

異なる文化を背景に、多様な民俗がブロック状に地域社会を形成しているアメリカにおいては、PAが各コミュニティの「和解や表明」のための道具に使われていました。文化、風土の異なる日本においては、道具としてPAはどのように使われれば良いのでしょうか。

生まれ育った街や村には、自分が文化、経済、風土、伝統、自然に所属している、あるいは人の世を越えた何ものかに包ま

れている、そういう不思議な感情や感覚がかつてはありました。遊びほうけた里山やせせらぎ、祭りの日の鎮守の森、一つのコスモスであった花街。人々はこの様な地域に根ざした景観を“ゆりかご”として育ちました。人が美しく成熟するためには、人を育んだ景観を構成する物や事が本質的な部分で持続し繰り返されることが必要です。明治以降、多くの河、海の護岸整備、街造り、道造り等の公共事業は社会的機能を優先し、地域社会や個人の心への情緒機能を置き忘れてきました。西欧やアジアと文化を異にしている日本アイデンティティが何処にあるのか、その姿を景観の中に形象化するための道具としてアーティストのvoiceは有効だと考えています。アイデンティティ無きグローバル化は崩壊する危険性があります。

かつて私たちは「情緒資源」に囲まれていました。今、情緒資源がディスプレイの中にしかないのは淋しいかぎりです。私たちはPAの関係をツールとして、命を育てる「ゆりかご」に資するPAの可能性を、アラン氏とは異なる背景の中

で試みたいと考えています。これは私たちのコミュニティが失いつつある「情緒資源の再構築」です。情緒資源の再構築のための比重の多くはパブリック＝行政にあります。ここで行政に最もお願いしたい事は、PAや景観を考え、かつ選定するにあたり、住民や専門家が構成員となるオープンシステムの協議会を発足して欲しいということです。アラン氏の発言の中で私達が最も感銘を受けたのはhonest（正直）に話し合うということでした。人は時代に則したシステムが稼働と構築の中で最もhonestになれると思います。

調査研究委員からのコメント

石井博美委員

プロデューサー的な立場の人が、行政の中に入っていけるシステムに感心しました。日本では、美術好きのお役人がパブリックアートを手がけるといった程度です。外部から人材を入れるのと、役所の中からの当用とでは仕事と趣味ほどの落差があります。しかしお役人は街造りの

仕事をしつつ曲がりなりにもやり切っていますからいくら好きとは言え立派なものだと思います。

竹村暢子委員

徳川時代より百年まだ、官尊民卑の日本と絶対的民主主義をFain playを最も尊ぶU.S.A.の行政と市民のあり方がアート以前にあると感じました。

露口典子委員

印象的だった点は、メトロアートの目的を達成するためのスタンダードの中で「過去におけるコミュニティのプロフィールを共有する」事があげられた点だ。あらゆる価値観のルツボにある米国が、近代産業の中で樹立させてきたものはマニュアル化だった。その米国がプロフィールを共有することに時間を割こうとしている！

山本 誠氏

アート決定のプロセスをオープンにすることで政治的圧力や個人の力の影響を排除している。これは見習うべき。 





aaca会員
 俣竹中工務店 常務取締役
 EIICHI MURAMATSU
村松 映一
 東京都中央区銀座8-21-1
 TEL.03-3542-7100

佐川美術館に想うこと

佐川急便創業40周年記念事業として企画された佐川美術館は日本画家平山郁夫氏と彫刻家佐藤忠良氏の作品と中心に展示し、社会貢献と目的として文化事業の一環として設立された。

琵琶湖をとりまく山並みを背景に、のびやかなスケール感をもつ2棟の切妻屋根で構成された美術館は、とり囲む水庭にその姿を写し、建築とランドスケープの一体化した古来よりのこの地のぞぼくで雄大な心象風景を再生している。壁面を構成する化粧コンクリート打放しと屋根の素材となっている亜鉛メッキステンレスのモノトーンな色彩、奥深い軒庇と列柱の陰影が醸し出す禁欲的な表現がその存在感を際立たせている。エントランスホールへと導く水庭沿いのプロムナード、展示室への期待感をいやがうえにも高揚させるモノリシックなエントランスホールを基点としてそれぞれの展示室へと誘導する内外に渡る経路空間は、水の

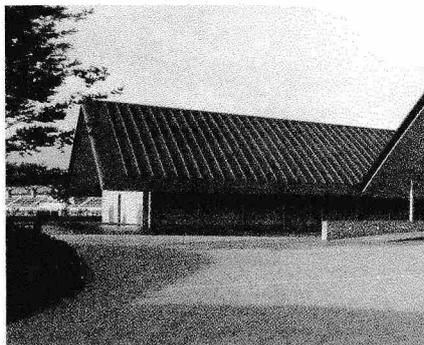
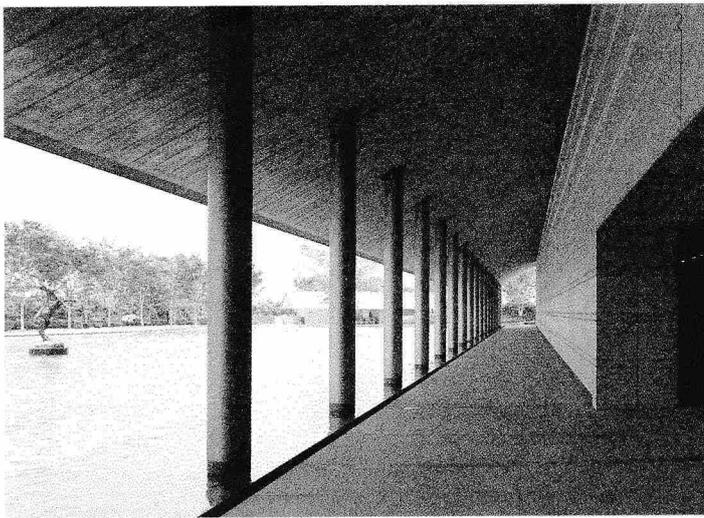
多様な表現を親しめるよう水庭を巡るシーケンスとして構成されている。展示室へ作品が特定できる常設展示を主としているため適度に分節された室の連続となっている。日本画展示室は比較的小びりの展示室群で構成し、その中で最も大きな室は床の間を意図した展示方式で展示物をひきたたせている。一方彫刻展示室は露出スポットライトとライティングダクトによるフレキシブルな照明方式とポルト天井や外の見える室を設けるなど空間の変化のあしらいによりそれぞれ展示物に息吹をもたらしている。

水をテーマとしたランドスケープ・建築・アートが三位一体となった環境を創造しようとする意図を栗和田栄一委員長（佐川急便社長）をはじめとする設立準備委員会のメンバーとの細部に至る調整過程においてその概念を全員が共有し、貫徹したことがこの美術館の存在する意義を高める結果になったのではないかとと思われる。

なによりも感銘を受けたのはプロムナ

ード前庭で、両手を広げて抱擁するように人々を招き入れる女人裸像「萌」、プロムナード沿いの水庭から水しぶきをたてながら飛び立ちあがらんばかりの躍動感溢れる「蝦夷鹿」、レストラン沿いの通路の水庭に静かに佇むマントを被った女人像「冬の像」はそれぞれの場において不可欠な存在となって空間に緊張感を醸しだしている。建物と彫刻は水庭と一体となって見事なハーモニーを奏で、訪れる人々の心を癒す。写真家村井修氏は鋭い洞察力と感性を持ってそのことを捉えている。建物をつくる課程での緻密で厳格なシミュレーションによる試行錯誤によってつくりだされた成果ではないかと思われる。「枠に入って枠をいでよ」という佐藤忠良氏の作品づくりの想いがこの美術館を魅力ある作品に仕立てている。設計を担当した川北英・内海慎介両氏にとって貴重な体験として記憶にとどめることになるであろう。

写真は村井修氏の撮影による。





aaca会員
染色家
SHIZUE YUKIYOSHI
行吉 志津枝
東京都目黒区東山1-27-4
TEL03-3713-3228

私の中での「伝統と現代」

“人と布”の歴史は古く、何千年もの前に遡ります。世界各地には優れた染織品が数多くあり、日本もその伝統を有する国の1つです。正倉院に残る品々をとって見ても、その美しさ技術の偉大さとともに、それを凌ぐものはその後出ていないとさえ言われています。又、小袖や能装束、狂言の衣装、武将達の陣羽織、友禅の着物、等々それらの素晴らしさには、目を瞠るものがあります。

現代の染色はというと、様々な実験的発表がなされ、“布”の可能性は日々新しい展開を見せています。

1960年代、着物を染めるアルバイトで、染色に出会いました。染色を勉強したい！。けれど通っていた美術大学では、量産を念頭に置いたデザインへの考え方が主流だったし、住み込みで技術を習得した職人さん達には、太刀打ちできなかつたし、“独学”しか道はありませんでした。そんな私なりの紆余曲折を経ながら、今は2つの方向の仕事をしています。

①現代的な建築空間との仕事や、日展や、現代工芸展への出品、②身に纏う着物や帯の仕事、この私の中での伝統と現代と

も言える2つの仕事の狭間で、どちらかを選ぶべきかと迷ったり、自信を喪失したりしながら仕事を続けました。悩みながらの10年間、多くのクリエイターたちと出会い、1つ1つの課題に取り組んでいる内に、伝統的、現代的、とか区別することはない、偉大な伝統に対する憧憬はそのままに、今自分が出来ることをやればいいと言う気持ちになれたのです。

伝統と言うものは“かたち”として外側にあるものだけでなく、日本人である私の身体の中に血として内側にあるようにも思えます。

今鮮やかに思い出すのは、幼い時に見た、母の着物達です。特に“虫干し”と言う行事の時の、興奮は忘れることはできません。開け放たれた部屋、部屋に、衣桁や紐に掛たれた着物の柄。四季の花々の中に鳥や蝶 流水に貝、短冊、朝顔、蜻蛉。金糸、銀糸の縫いとり、厚みのある刺繍。50年を経た今もその色や柄はくっきりと記憶の中に、生き続けています。すべて東京の大空襲の時焼失してしまっただけですが…。

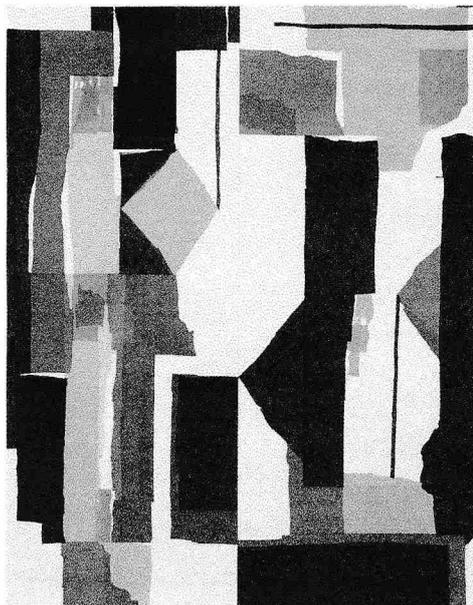
染色と言う技法に出会って、様々な仕事をする機会に恵まれました。着物では

花嫁衣装、振袖、留袖。建築空間では、ホテルロビーに、染色タペストリー、文化施設のホールロビーに染色した木と鏡面ステンレスを組み合わせたレリーフ、セラミックを使用した、体育施設のロビー壁画や、屋外のシンボルタワー。鶴ヶ岡八幡宮の齋館の天井に染布を張らせて頂いたり、資生堂の「花椿」の為に染めた巨大な染布。林雅子先生設計の「森の中のふたつ家」と言う美しい別荘の染色スクリーン。

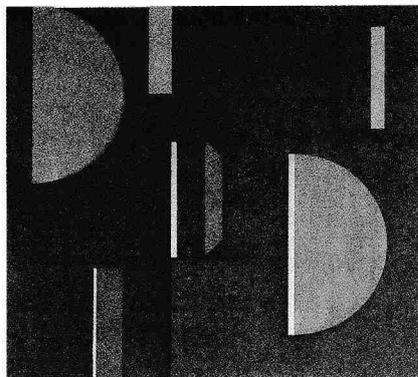
どの仕事も出来上がる迄は、自分の力では、とても無理なのではないかと、不安なのですが、精一杯やって完成した時の嬉しさから、又新しい仕事に挑戦してしまうのです。

幼い時に受けた手仕事への感動が今も私を手仕事へと駆りたっているのかも知れません。

コンピューターやあらゆる機械は、その精度を高め、手で創る何百倍もの早さでリアルな感覚や、テクスチャを容易にする時代になりました。こんな時代だからこそ、伝統に対する憧れを持ちながら、自由に現代的な表現を探し続けて行きたいと思っています。



「扉」(1999年3月 現代工芸展出品作品)



「夜」(木を染めたレリーフ)



振袖「花車」(1998年)

メタルで、21世紀の都市空間に美を創造する。



八王子駅北口地下駐車場「絹の舞」

施主：八王子市

設計・監理：八王子市都市整備部再開発課

セントラルコンサルタント株式会社

施工：ラダタ・坂本・黒須・田中・高砂・坂本・山栄建設共同企業体

給気塔及び帯パネル施工：菊川工業株式会社

材質・仕上：本体…ステンレス(塗装)

帯…チタン(グラデーション仕上げ)

